

「大粗坑古道」を歩いてから九份の宿に戻るには「猴硐駅」から電車に乗って「瑞芳」駅経由の予定だった。「小粗坑古道」を歩いて「猴硐駅」に行けるなら、今から「大粗坑古道」の入口を探してウロウロするより、この「小粗坑古道」に行くほうがよいだろう、と思った。時に9時半だった。

灌木の道は、すぐに草地の道になり、展望が開けた。朝食前に登った「基隆山」が九份の街を裾に従えて、そびえていた。雨が降るのが近いのか、山の肩に雲が湧いていた。大して登らないうちに、坂を上り詰めて峠状の場所に着いた。ベンチが有り一休みする場所だ。ここからは下り坂となる。

ベンチに座って、甘すぎるパンをかじりながら近くを見わたせば、細い踏み跡が山稜を登る方向に有った。そして「→小粗口山200m」と書いた札が掛っていた。すぐそばに未知の山頂があるらしい。200mなら近いから行ってみよう、と藪っぼい踏み跡をたどる。ススキのような草をかき分けて歩くと、ほんの5分ほどで「小粗口山485m」と書いた標識がある、開けた場所に着いた。山頂という感じでは無かったが山を一つ稼いだ気がして少し満足だった。

「小粗口山」には長居せず、すぐ峠状のところまで戻る。いよいよ山越えの下り坂になると、今までと違って樹木が密集した山道になった。陽が差さないためか、湿っていて登山道全体がひどく苔むしている。



小粗坑古道から見た九份の街と基隆山



山神様のほくら、コンクリート製である

部分的には、「基隆山」の下山路より滑りやすいところが有る。

履いている靴は、本格的な登山靴ではないので、摩擦が少し弱い。里山だから登山用の杖は要らないと思い、持ってこなかった。杖があれば滑り止めになり有用だったろう。しかたがない、転んで尻餅をつけば臀部が苔色染めのズボンができるまでだ。慎重に足を出して歩を進む。緊張の連続というわけでは無いが、結構気を遣って下り坂を進んだ。

山の様子は、伊豆の山か、九州の山といった感じで、照葉樹の森になっている。一般に鉱山や温泉が附近にある山、または有った山は、燃料や坑木の需要があるので手近なところから、樹木を切り出すことが多い。なので巨木は見当たらず比較的若木が多かった。おおむね照葉樹の下は暗いが、天気が曇りのため、さらに暗い。道の随所には自然観察用の、「植物案内板」が有った。私は1基ずつ立ち止まって案内板の花の絵を見たが、時季外れのためかそのような花は登山道付近には無かった。それでも、道端にはなじみの無い草や木の花が咲いていた。

10時半、古ぼけたコンクリート製の遺跡に出会った。説明板によると名前は「山神廟」というおやしろうだった。文章概略は1895年、日本が台湾を植民地化すると、台湾土着の信仰は排除され、日本式の神社を礼拝するように強要された。しかし、鉱山

の労働は危険を伴うため、例外的に土着鎮守様である「山神」を認めた。鉱夫たちのお守りとして労務関係がうまくいくようにとの配慮だ。元来「山神様」は純金像だったが、廃坑となって人々が去ると、純金像は盗まれて今は無いそうである。

時々石の階段になる。外傾した石段は摩擦で角が丸くなり、いやらしい。踏面の足乗せ部はどれも苔だらけ。転倒防止のため、たくさんのくさび形のキズを一面に穿った階段もあった。しかし歴史を感じさせる階段は、穿った時には滑り止めとして機能していただろうが、今は苔むして気休め程度だ。

今日は日曜日なので、何人かの登山者に会うだろうと思っていた。だがここまで誰にも会わず、寂しげな山道だった。かなり下ってくると車の音が聞こえるようになる。眼下に木の葉を透かして屋根が見えてきた。とうとう人家のあるところまで下りたのかな、と思った。屋根が見えてからすぐに人声が聞こえると、4人の女性が登ってきた。みな登山杖を持ち、鮮やかなザックを背負い、スカートからタイツの足を出した山ガールスタイルだ。

先頭が「早<sup>ゾー</sup>」と声をかけてきた。

二番目がもう時刻は遅いという訳か「不早<sup>フーゾー</sup>」と茶々をいれる。

ここまで歩いて思った。登山道は苔むしているし、誰にも会わないので、使われなくなった遊歩道か、と。しかし、登山者が登ってきたということは、見捨てられた遊歩道では無かったようで、ちょっとほっとした。

上から見た屋根は人家では無く、すでに廃屋の「小粗坑分班遺址」という鉱山の遺構だった。この場所はちょっとした広場になって、数人の女性が休んでいた。出会うのは女ばかり、男衆は来ないとこるなのか？



分かりづらいが、滑り止めの小孔を穿ってある石段

展望台への案内があったので行ってみた。山の腹を巻いている草深い道を10分ほど歩くと、太い角材をスノコ張りに仕立てた立派な展望台に着いた。断面が40cmも有りそうな角材がベンチとしておいてあった。「展望お立ち台」に立つと、残念ながら霧が立ちこめてほとんど見えない。遙か足下にぼんやりと見えて流れる河は、くもりガラス越しの絵を見るようであった。河と平行して曲線を描く道路と鉄道線路が見えた。折しも列車が川辺に沿って動いていたが、解像度の低い動画のようだった。

「小粗坑分班遺址」まで戻り、下山を続ける。間もなく山道がコンクリートの林道に変わり、遊歩道は終わる気配となった。さらに進むと、車の行き交う幹線道路に出た。狭い駐車場と「小粗坑古道」の

立派な案内板があった。ここで11時20分だった。

案内板によると「小粗坑古道」の「難度等級」は5段階の3で、「必備装備」には、雨傘と登山杖が記載されていた。傘はとにかく、登山道は滑るので杖の必携はもつとだ。

このあとは、川沿いの車道を20分ほど歩き、11時50分、ゴールの「猴硐<sup>ホウトン</sup>駅」に着いた。「猴硐<sup>ホウトン</sup>駅」は石炭産業盛んな頃の設備が、廃墟となっていたがそこを観光遺跡として



山ですれ違った女性たち。滑るので杖は必携





観光客で賑わう猴硐駅

利用していた。建物の一部は博物館になっていた。

それより猴硐は「猫村」で有名になっている。日本の台湾ガイド本にも載っているのだから、行ったことのある人、知っている人も多いただろう。

中国人を乗せた観光バスが、バス専用駐車場に並び、賑わっている。駅の周りは、ノラ猫どもがゆるゆるとくつろいでおり、なぜか数匹のノラ犬と共存していた。猫や犬をバスできた観光客がカメラを構えたり、撫でたりで一大遊園地化している。

私は「<sup>ハイキング</sup>健行」目的の結果、<sup>ホウトン</sup>猴硐駅に行ったのだが、日本で計画したときには、<sup>トン</sup>猴硐と猫村は同じ場所とは思わなかったので、猫村見物は余得である。

「九份」の宿に戻るため、猫村見物は早々に切り上げ、駅で切符を買い次の駅の「瑞芳」まで電車に乗った。<sup>トン</sup>猴硐駅は台湾東沿岸を縦貫する幹線と、盲腸線のローカル線の「平溪線」が通る。乗った電車は「平溪線」の電車で、沿線にある観光地からの乗客で満



ボランティアで日本語案内をする許さん（瑞芳駅で）



猫注意の交通標識

員だった。家族連れや若い二人連れが主な乗客である。台湾ではこのような気軽に楽しめる行楽が根付いているのだなと感じた。

日本に帰ってから小田急線の駅ポスターで「江之電、平溪線」は提携関係に有り、相互に特典切符があることを知った。これはなかなか面白い企画だ。

瑞芳駅に着く頃には、雨が降

り出した。山で降られなくてよかったと思った。時間が少し余ったので「瑞芳」駅周辺をさまよったが大した収穫は無かった。雨が激しくなったので、すぐに駅舎に逃げ込んだ。

「瑞芳」駅には2010年にも来たことがある。その時に駅構内で、日本人のために日本語で案内をしていた老婦人がいた。今回も同じ場所でガイドをしていた。そばに行って話を聞いた。名前は許坤山さん86歳。毎日ボランティアで観光案内所に詰めているという。許さんのような日本語教育世代は少数になった。いつまでもお元気だと願う。

九份で2日目の夜を過ごしてから、翌日信ちゃんの待つ「台中」へ行った。以前は半額だった新幹線の敬老割引(65歳以上)が、外国人には適用されなくなり、がっかりした。

次回では、台中に移る。

(続く)



雨に濡れた九份夜景